

よりよい地域との協働・共生を目指す生徒の育成

～振り返りを実践的な態度につなげる～

神奈川県小田原・足柄下地区技術・家庭科研究部会第5分科会

小田原市立千代中学校 坂本 知穂

1 はじめに

全国的な少子化の進行は神奈川県においても例外ではなく、令和4年度の神奈川県合計特殊出生率は1.17と過去最少を記録した。また、県西部地区は県内でも特に高齢化率が高く、高齢者が地域を支えている実態がある。

学習指導要領（平成29年度告示）では、少子高齢化社会の進展に対応して、幼児と触れ合う活動などを一層充実するとともに、高齢者などの地域の人々と協働することについて新設されている。

そこで、生徒が家族の一員としてよりよい生活を実現するために、体験を通して幼児を知ることが重要であると考え、触れ合い体験を生かした効果的な学習活動を探りたい。また、子どもが育つ環境の一部として中学生が実践できることを考えることで、現在地域で生活している幼児に目を向け、中学生にとっても、幼児にとっても過ごしやすい環境について深めたいと考えた。そこで、よりよい地域との協働・共生ができる生徒の育成を目指し、研究主題を設定した。

2 研究のねらい

(1) 生徒の実態

本研究にあたり、小田原・足柄下地区（小田原市・箱根町・真鶴町・湯河原町）中学校14校に家族・家庭生活の学習についてのアンケートを行った。その中で、家族以外の人との関わりについての項目では、地域が主催する行事のボランティア活動やお祭りなどに参加しているものの、地域の人たちと一緒に活動することや関わることは少ないと感じている生徒がいることがわかった。また、地域行事の縮小や学校行事の精選などにより、今までは身近にあった幼

児と関わる機会が少なくなっている。

(2) 目指す生徒像

地域の一員として課題を見出し、誰にとっても居心地のよい地域の在り方を考え、自ら行動し実践できる生徒

3 研究仮説

家族・家庭生活の基礎的・基本的な知識・技能を習得し、幼児との触れ合い体験等を利用した問題解決学習を行うことで、家庭生活における幼児の発育を支える課題を解決する力や、地域の一員として今できる幼児との関わり方を工夫しようとする実践的な態度を育成できるのではないかと。

4 研究内容

(1) 指導計画

幼児と触れ合う機会の有無に関わらず、自分事として捉え、幼児との関わり方について考える時間を設定する必要があると考え、次のような指導計画を立てた。

表1 「幼児と家庭生活」指導計画（例）

幼児の心身の発達や生活の特徴	5時間
幼児のためのおやつ作り（実習も含む）	2時間
幼児にとっての遊びの意義と支援	1時間
幼児との触れ合い体験計画・準備	3時間
触れ合い体験	2時間
中学生が今できる幼児との関わり	1時間
学習・題材のまとめ	1時間

『幼児の心身の発達や生活の特徴』から『幼児にとっての遊びの意義と支援』では、幼児に関わる基

礎的・基本的な知識について学習し、幼児と関わる際のポイントを押さえる場面とした。

これらの内容を生かし、どの年齢だとどのような遊びができるか、どのように接すると幼児が興味を持ってくれるかなどの具体的な遊びやそれに関わるおもちゃなどを考えた。触れ合い体験を行う学校では考えた内容を実践し(表1)、触れ合い体験の実施が難しい学校では、製作したおもちゃなどを使って、幼児に関わる地域の人との活動などの取り組みを行った。

『中学生が今できる幼児との関わり』では、地域の一員として、同じ地域に住む幼児にとってどのような地域だと暮らしやすいのか、保護者にとってどのような環境だと嬉しいのか、中学生にとっても幼児にとっても居心地のよい地域とはどのような状態かを考え、今後の関わり方と地域について考える時間とした。

(2) 幼児との触れ合い体験の実践

① グループでの触れ合い体験(A校での実践)

対象年齢別にグループを作り、それまでの学習で得た知識を生かし、ふれあい体験の計画を立てた。その中で、学習した幼児の特性や身体的な特徴などを考慮して、生徒自らが幼児との接し方を考えた。

(表2) また、幼児とのコミュニケーションツールの一つとして、名札の製作も行った。(写真1)

表2 生徒が考えた幼児との接し方

- ・笑顔で話しかけるようにする。
- ・いきなり大きな声で話しかけない。
- ・目線を合わせて話をする。
- ・自分からあいさつをしてみる。
- ・爪を短くしておく。けがをさせない。
- ・転んだりケガをしたりしていたら、すぐに保育園の先生に伝える。

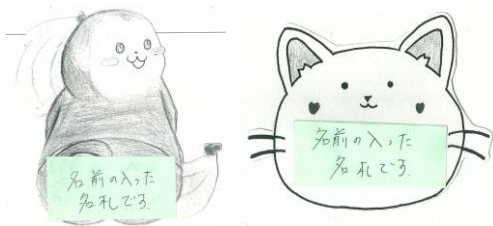


写真1 生徒が製作した名札

遊びの内容については、タブレット端末を利用し、具体的に何歳児がどのような遊びができるかを調べ、天候や環境に応じて遊ぶ内容を選択できるよう、ワークシートに記述した。

幼児の生活の実際
保育園で観察と遊ぶ内容を考えよう

月 日

初めて「幼児」といふ言葉にふれ、観察の準備をする。」

わたしが行くのは、_____ (観察の場所です)

遊びの内容	触れ合いの様子	触れ合いの場面
遊ぶ前 の注意 事項が 記入さ れる。		

「毎日
で、目
録が
つく
る。」

ワークシート

表3 生徒が考えた対象年齢別の遊び

年齢	遊びの内容
5歳児	伝言ゲーム、ハンカチ落とし、折り紙、ジェスチャーゲーム、しっぽとり
4歳児	ケンケンパ、だるまさんがころんだ、はないちもんめ、人間間違い探し
3歳児	お絵描き、じゃんけん列車、鬼ごっこ色探しゲーム、転がしドッチボール
2歳児	ごっこ遊び、ケンケンパ、お絵描き、なわとびによろよろ、貨物列車
1歳児	いないいないばあ、絵本の読み聞かせ、ちぎり絵、ボール遊び



写真2 触れ合い体験の様子

体験終了後の振り返りでは、事前に考えた幼児への接し方が適切だったか、再度幼児に会う機会があったらどのように接したいかなどを考えた。

表4 A校の振り返り(抜粋)

- ・ものを作ったり、遊んだりすることがメインではなく、それらを通してコミュニケーションをとることが大事なので、ジェスチャーや分かりやすい話し方で聞き取りやすくなるように意識したい。
- ・あまり目を見て話せなかったのが反省なので、今度は目を見て話すことで気持ちが伝わるよう意識できるようにしたい。
- ・幼児に話しかけてもなかなか会話が続かなか

ったので、安心して話せるように中学生同士でコミュニケーションをとっていることが必要だと思った。

体験を踏まえて今の自分にできる幼児との関わりについて説明することを体験のまとめとし、実践的な態度につなげるよう取り組んだ。

表5 体験のまとめ（抜粋）

＜家族の役割＞

- ・選べる、学べる、動き回れる環境を設けたい。
- ・自分が見本だから間違っただけを覚えさせないようにする。
- ・ケンカの少ない仲の良い環境が重要だと思う。
- ・色々な人と、たくさん関わる機会をつくる。
- ・人格を否定するような叱り方をしない。

＜今、中学生として実践できること＞

- ・幼児が外で転んでもけがをしない環境をつくるために、ごみや割れ物の破片があったら拾ったり、端に寄せたりする。
- ・直接幼児に関わって何かをするのは難しいと思うが、誰かのためを思って行動することは大切だと思った。地域の人との距離を縮めたい。
- ・ベビーカーなどを押していてドアが開けられない人がいたら代わりに開ける。
- ・もし周りに泣いている幼児がいたら話しかけてあげることができると思う。
- ・幼児のお手本となる行動をとる。
- ・あいさつをする。

② 複数回の触れ合い体験（B校での実践）

まず、題材の導入として、1回目の幼児との触れ合い体験（2年時3月）を実施した。自分自身の幼児期のイメージが大きい中学生にとって、これから学ぶ幼児の実態を直接的な体験を通して感じ取る場面として設定した。

中学生4人グループに対して1人の幼児を担当し、自分たちの経験から、きっと楽しんでもらえるだろうという遊びを準備した。中学校に幼児が来校しての活動で、対象の幼児の年齢、性別、活動時間

（30分）、使える教室やグラウンドの環境、遊び道具は身近な素材やすぐに準備できるものから作ることを条件にグループごとに話し合いをした。当日は、室内遊びではトランプ、ペットボトルボーリング、輪投げ、クイズなど、外遊びではだるまさんがころんだ、おにごっこなどを行った。

体験後の振り返りでは、幼児の体の特徴や遊びの内容について感じたことや気づいたことに加えて体験前と体験後に変化した考えを記述した。

表6 B校の振り返り（抜粋）

- ・何でも手伝ってあげようと思っていたけど、見守ってあげることも大切だと感じた。
- ・もっと何もできないと思っていたけどハサミや計算などいろいろなことができるので驚いた。
- ・得点係など役割を任せるとさらに楽しく遊んでくれた。
- ・おもちゃを作るところから一緒に行った。好きな色やキャラクターなどが分かって、遊ぶ時にも会話ができた。
- ・一つの遊び方だとすぐに飽きてしまったから、順番を変えたり、得点を多くしたりして時間まで遊ばせることができた。
- ・なかなか一緒に遊ぶことは難しかったけど、隣で同じことをするだけでも触れ合えた。
- ・準備や移動するのに時間が必要だと分かった。
- ・中学校の階段は幼児にとって一段が高く手すりの位置も高いから、手をつないだり声かけが必要だった。地域のイベントや広域避難所（2次施設）として使う時にも注意が必要だと思った。

体験を通して知った幼児の実態や特徴が、なぜそうだったのかということはこの後の学習で確認し、2回目（3年時11月）の体験へとつなげることで、より適切な解決方法を選び、具体的で工夫された体験内容になると考えている。

③ 触れ合い体験が難しい学校での実践例

A C校の実践

地域のボランティアに依頼し、絵本の読み聞かせをしてもらった。その経験をもとに、オリジナル絵本の製作とロールプレイングでの読み聞かせを行った。



写真3 「ボランティアによる読み聞かせ」と
「生徒が製作した絵本」

イ D校の実践

衣生活の領域で習得した基礎縫いの技術を活用し、パペット人形を製作した。また、その人形を用いて、生活習慣についての人形劇をストーリーから創作し、1分間ムービーとして動画にまとめた。その動画は地域の幼稚園の先生方に見ていただき、アドバイスをいただいた。



写真4 製作したパペット人形

5 研究の成果と課題

(1) 成果

体験後の振り返りから、実際に幼児との触れ合いや幼児と関わる地域の人たちと活動することで、より具体的に幼児の特徴や発達段階を理解していることが分かった。特に、幼児への配慮やコミュニケーションの重要性については、幼児との関わり方の難しさを感じながらも、具体的な声掛けの仕方などの記述が多く見られた。体験前には直接的に関わることが得意ではないと答えていた生徒も、体験後には間接的な支援の方法を考えたいと、多角的な視点を持ち、実感を伴ってより深く理解することができた。

また、題材のまとめとして、『幼児にとっても中学生にとっても居心地がよい地域』について話し合う時間を設けた。その中で、直接関わる人的な資源以外にも、公共施設の配置や安全面の配慮がなされていることの重要性に気付くことができた。住生活での既習事項も関連付けて活用し、地域の誰もがよりよい生活を営むために必要なことを実践していこうとする態度を育むことができた。

表7 居心地がよい地域

＜人的な資源について＞

- ・優しい人がたくさんいる。
- ・幼児のことを理解して関わってくれる人が多い。
- ・助け合いができる人間関係。
- ・気軽に挨拶したり、話しかけたりできる。

＜環境的な資源について＞

- ・治安がよい。
- ・公園やスーパーなどが遠すぎない。
- ・地域の人同士が触れ合う場がある。

＜安全面の資源について＞

- ・清潔で歩きやすい歩道がある。
- ・交通量が多すぎず、信号がある。

(2) 今後の課題

家族・家庭生活の学習において、家庭や地域の理解と協力が不可欠であるので、各家庭や生徒のプライバシーに配慮しながら、学習内容を地域や家庭に発信していくことが必要である。また、幼児期のみにはフォーカスして終わりではなく、地域の一員として、誰もが健康で快適・安全に過ごせる社会を目指していく生徒の育成を図りたい。そのためにも様々な題材で地域との協働・共生について考えさせるような題材研究を進めていきたい。

5 参考文献

- ・中学校学習指導要領解説 技術・家庭編
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学校 技術・家庭）

